

機関番号：3 2 6 2 1

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2008～2010

課題番号：2 0 3 2 0 1 1 6

研究課題名 (和文) 日独関係史における相互認識：想像、イメージ、ステレオタイプ

研究課題名 (英文) Mutual Perceptions in Japanese-German Relations: Images, Imaginings, and Stereotypes

研究代表者

サーラ スヴェン (SAALER SVEN)

上智大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：7 0 4 0 1 2 0 5

研究成果の概要 (和文)：

本研究は、近代日本とドイツの関係史において、両国の相互イメージの形成とその形成要因、そして、このような相互イメージが二国間関係に与えた影響を明らかにしようとするものであった。2010・11年の日独修好150周年の催し物として、この研究をまとめる国際会議が2010年12月に行われ、20人の研究者が日独相互イメージを分析し、そのイメージを表象する視覚的資料を紹介した。なお、日独関係史の研究者のネットワークが深化された。日本とドイツは現在では、強い友好関係で結ばれているとはいえ、過去には、両国のメディアにおいて歪曲された他国のイメージが浮かび、そして、現在でも浮かぶことが明らかになり、多様な啓蒙活動の必要性が指摘された。

研究成果の概要 (英文)：

This research project explored the development of mutual perceptions in Japanese-German relations and analyzed the influence of the visual imagery on the bilateral relationship between the two countries. 2010-11 marked the 150th anniversary of Japanese-German relations. On this occasion, an international symposium was held, in December 2010, with the objective of summarizing the results of this research project. On the symposium, 20 scholars from five countries analyzed and discussed mutual Japanese-German perceptions and introduced visual sources expressing the mutual images. Further, the networks of historians of Japanese-German relations were deepened on this symposium. On the symposium it became clear that although Japanese-German relations today are strong and friendly, distorted images of one country continue to emerge in the media of the other. It was pointed out that scholars have the important task to continue scrutinizing such distorted images.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2009年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2010年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
総計	11,800,000	3,540,000	15,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：①日独関係史 ②国際関係史 ③外交史 ④軍国主義 ⑤帝国主義

1. 研究開始当初の背景

| 本研究は、近代日本とドイツの関係史にお

いて、両国の相互イメージの形成とその形成要因、そしてこのような相互イメージが二国間関係に与えた影響を明らかにするものであった。1860・1861年のプロイセン使節団の来日に始まった日本とドイツの二国間関係が2010・11年に150周年を迎えるなか、近代以降の日独関係を改めて再評価しようとする関心が高まっていた。しかしその際、これまでの日独関係に関する研究が専ら外交関係と経済関係に焦点を当ててきたのに対して、本研究は「相互イメージ」という観点を導入し、しかも最近の歴史学で新たな流れとなっているビジュアル資料を集中的に活用することを提案するものであった。

## 2. 研究の目的

国際関係を「国」と「国」の関係という枠組みで論じることはもはや十分説得力をもたないという指摘がされることもあるが、自国のイメージを他国において改善することは現在でも国家の重大な関心事であり、受手となる人々の頭の中でも「国」単位のイメージが相変わらず根強くあることは間違いない。国際関係におけるイメージと相互認識、とりわけメディアによって伝えられる他国・他者の視覚化は集団間に強い緊張をもたらすこともあり、外交関係における他者認識を歴史的に考察することは、日本の外交関係を考える際にも重要な課題であると言える。こうした点から、本研究は、日本とドイツという二つの近代国家の二国間関係において、現在にいたるまでの両国の相互イメージの形成と変容、その視覚化の過程などを明らかにし、イメージの変容を規定した国内的・国際的要因を考究するとともに、その相互イメージが二国間関係にどのような影響を与えたか、また日独両国の間に現在どのような相互認識が形成されているかについて考察した。

## 3. 研究の方法

本研究は、旧来の政治史的なアプローチをも包含しながら、さらに観点を広げ、思想史、メディア史、政治学、古写真史研究などの諸分野において行われつつある研究を統合し、その多様な問題意識と視点を生かした分析を心がけた。それはすなわち幅広い種類の資料を参照することを意味する。日独関係史では、従来の研究は主に政治・外交関係の資料を利用してきたが、本研究では相互イメージの変容というテーマを扱うことから、雑誌、論説などに加え、ビジュアル・メディア（古写真、記念葉書、版画、戦争プロパガンダ、国発行のパンフレット、教科書、百科事典、風刺画と歴史画、インターネットなど）を中心に、近年の歴史学において新たに重要視されつつある非文献資料を含めた各種の新しい

資料を利用し、その視覚的資料が社会において幅広く紹介されることに努めた。そのなかで、旧来の歴史学による日独関係史の支配を乗り越え、多角的な (multidisciplinary) アプローチをとり、メディア史、映画史、社会科学等、多様な方法の学者の協力を積極的に求めた。

## 4. 研究成果

### (1) 総論

本研究は、近代日本とドイツの関係史における旧来の研究の中心であった外交史・経済史からのパラダイムシフトを訴え、日独関係におけるソフトパワーの重要性を明らかにした。両国において、現実的な外交・経済関係よりも、相互的なポピュラー・イメージに関連する諸相の方が重要な役割を果たしたといえよう。これは、日本とドイツの関係に限られた現象ではないが、その両国の距離と、連絡・交通の不都合のため、特に目立つ現象であるといえよう。20世紀半ばまで、文化的・経済的・ヒト的な日独交流は実際非常に限られており、そのため両国において他国に対する様々なイメージが強く根付き、思い込みも強かったかと思われる。

本研究の結果で明らかになったのは、その両国にあった他国のイメージは、諸政府の外交に影響を与えたこともあったが、むしろ両国の国際システムにおける位置が、他国におけるイメージで反映されたといってもよからう。たとえば、19世紀半ば、すなわち日独関係の初期において、ドイツでは「弱い日本」「柔らかない日本」のイメージ、すなわちジャポニズムの延長戦にあったイメージが支配的だった。しかし、日本が国際舞台において大国として台頭した結果、ドイツの一部のメディア、政府において「恐ろしい日本」、「黄禍論」的なイメージが浮上し、これは1895年の「三国干渉」で緊張した相互関係をもたらした。結果的には二国間関係の悪化につながった。

ただし、そのときとそれ以降でも、親日的な声はドイツで、そして親独的な声は日本で消えることはなく、1920年代における再接近につながった。これは1930年代、ドイツにおける日本の「武士道」的な心の美化、日本におけるドイツ崇拜の再発を生じさせ、日独の同盟関係と戦争協力という帰結にいたった。

日本とドイツは、現在では強い友好関係で結ばれているとはいえ、過去には、両国のメディアにおいて歪曲された他国のイメージが浮かび、そして現在でも浮かぶことが明らか

になり、関係者からの多様な啓蒙活動の必要性が指摘された。

## (2) 国際シンポジウム

このような展開を多様な観点から分析、紹介するために定期的な研究会、国際ワークショップ（2010年6月）、そして2010・11年の日独修好150周年の催し物としても承認されていた国際会議が2010年12月に行われた。この国際会議では、20人の研究者が日独相互イメージを分析する報告をし、そのイメージを表象する視覚的資料を紹介した。なお、日独関係史の研究者のネットワークが深化された。このシンポジウムは複数の新聞でも取り上げられ、社会一般にも研究成果が浸透したといえる。『毎日新聞』では、大きなシンポジウム予告が掲載されたため、一般の参加者も多く、参加者は延べ人数150人を超えた。

このシンポジウムは在日ドイツ大使館の「日独交流150周年」の正式な催し物として公認され、大使館のホームページで案内された上、在日ドイツ連邦共和国大使のVolker STANZEL氏がシンポジウムで講演をされた。また、来日中であったドイツ国会副議長のWolfgang THIERSE氏もシンポジウムの閉会の挨拶をされた。シンポジウムの諸報告を出版物でまとめるため、報告の翻訳の財源を確保し、将来に日本語版・英語版の2冊の出版物を企画し、出版社の協力も確保した。

## (3) 出版活動

本研究プロジェクトの代表者・研究分担者を始め、協力者として参加した学者たちも、多数の研究成果を刊行し、様々なところで報告・講演というかたちでこのプロジェクトの成果を広く社会に紹介した。2010年12月のシンポジウムで報告された内容の一部はすでに雑誌、本で刊行され、さらに、参加者の論文を中心に、今後日本語と英語の論文集を作成する予定である。

代表者・研究分担者は日本の資料館のみならず、ドイツ、イギリス、米国の資料館でも日独関係史におけるイメージに関する資料を見つけ出し、研究論文・報告というかたちで広く紹介するように努めた。本研究プロジェクトの代表者はイギリスのSebastian Dobson氏と協力し、特に1860・61年のプロイセン・ドイツからのオイレンブルグ使節団の残した版画・素描・写真の整理に努めた。この資料を本というかたちでまとめ、2011年秋に刊行する予定である（現在編集中）。同様な内容

で展示会も企画された（(5)を参照）。

このビジュアル資料を整理したため、在日ドイツ大使館の依頼を受けて、その資料の何点かが、2011年1月24日に開催された、皇太子殿下ご臨席の下での、「日独外交関係樹立150周年記念式典」（於、東京・港区の国立新美術館）で展示された（[http://www.tokyo.diplo.de/Vertretung/tokyo/ja/\\_Bildgalerie/Festakt2011/TOP.html](http://www.tokyo.diplo.de/Vertretung/tokyo/ja/_Bildgalerie/Festakt2011/TOP.html)）。

## (4) 他団体との協力

なお、3年間を通じて、代表者は様々な組織・団体と協力し、共同で催し物を企画したり、情報提供したり、第一資料の公開に努めた。上述のように、代表者は在日ドイツ連邦共和国大使館に情報提供を依頼され、「日独外交関係樹立150周年記念式典」（2011年1月24日）で展示されたオイレンブルグ使節団の版画などを提供・紹介した。さらに、「日独交流150周年」という公式ホームページの開設（<http://www.dj150.jp/>）にあたって、代表者の著書『明治初期の日本：ドイツ外交官アイゼンデッヒャー公使の写真帖より』の表紙がそのホームページのデザインの中心として採用され、また、代表者が「日独関係史の150周年」という小論を一般読者向けに執筆し、掲載された。

プロジェクトのホームページ（[www.nichidoku.japanesehistory.de](http://www.nichidoku.japanesehistory.de)）を開いたのみならず、在東京の(社)ドイツ東洋文化研究協会(OAG)のデジタルライブラリーの充実を促して、情報・資料を提供し、入手の難しい、貴重な第一資料を同協会のHPで一般公開するように働きかけた（<http://www.oag.jp/digitale-bibliothek/sonstige-buecher/>）。

## (5) 展示会

3年間を通じて、2つの展示会を統括し、開催された。そのテーマは「西洋人の日本観：OAG ドイツ東洋文化研究協会の業績」（2010年）と「プロイセン・ドイツが観た幕末日本：1860年・1861年のオイレンブルグ使節団が残した版画・素描・写真」（2011年）であった。両方ともドイツ東洋文化研究協会(OAG)と奈良県立図書情報館の共同企画で、日独関係におけるイメージ形成を取り上げて、幅広いオーディエンスに日独関係史というテーマを紹介した。両方の展示会が日本語、ドイツ語を併用し、現在までOAGのHPで継続的にバーチ

ャル展示会として公開されており（  
http://www.oag.jp/veranstaltungen/virtuelle-ausstellung-top/）、幅広く見られている。

本研究プロジェクトの成果として、様々な組織と効率よく協力したうえ、社会のニーズに合わせて研究を進めることができ、社会に大きな還元をしたと思われる。いくつか残っている課題もあるが、これからもまだ何冊かの本を刊行することが決まっており、また、継続的に関連ホームページの充実に努めているので、研究成果を継続的に、かつ簡単にアクセスできるかたちで、一般公開に努めていく予定である。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ① サーラ・スヴェン、「在日ドイツ人の日本観。日本文化、神道と天皇のイメージに関する言説を中心に」、『神園』、第二号、2010年5月、2010年、40-70頁、査読無
- ② 田嶋信雄、「日中戦争・第二次世界大戦と日中ソ関係」、『外務省外交史料館報』、第23号、2010年、1-24頁、査読無
- ③ 田嶋信雄、「ナチス・ドイツと中国国民政府 1933-1936（一）」、『成城法学』、第79号、2010年、45-74頁、査読無
- ④ 田嶋信雄、「孫中山与德国——兼論“中徳蘇聯盟”的構想」、『南京大学学報』、第3巻、2009年、75-91頁、査読無
- ⑤ サーラ・スヴェン、「日独関係史一五〇周年と日独関係史の研究」、『年報 日本現代史』、第14号、2009年、215-231頁、査読無
- ⑥ サーラ・スヴェン、「日本とドイツにおける歴史認識」、『国立歴史民俗博物館報告』、147集、2008年、561-578頁、査読無

〔学会発表〕（計11件）

- ① 加藤陽子、「明治期における日本陸軍のドイツ観」、国際シンポジウム「日独関係史における相互認識：想像、イメージ、ステレオタイプ」、2010年12月4-5日、OAGハウス・ドイツ文化会館
- ② Rolf-Harald Wippich、「風刺画家から見た日本：帝政ドイツにおける『クラッペラダッチュ』と『シンプリチシムス』の日本観」、国際シンポジウム「日独関係史における相互認識：想像、イメージ、ステレ

オタイプ」、2010年12月4-5日、OAGハウス・ドイツ文化会館

- ③ 工藤章、「第1次世界大戦と日本における『総力戦』認識」、国際シンポジウム「日独関係史における相互認識：想像、イメージ、ステレオタイプ」、2010年12月4-5日、OAGハウス・ドイツ文化会館
- ④ 田嶋信雄、「ナチズム期ドイツ高官の日本イメージ」、国際シンポジウム「日独関係史における相互認識：想像、イメージ、ステレオタイプ」、2010年12月4-5日、OAGハウス・ドイツ文化会館
- ⑤ 川喜田敦子、「『過去』をめぐる自己他者イメージから考える戦後の日独関係、国際シンポジウム」、「日独関係史における相互認識：想像、イメージ、ステレオタイプ」、2010年12月4-5日、OAGハウス・ドイツ文化会館
- ⑥ 加藤陽子、「歴史と文書 戦争と革命の二〇世紀を中心に」、ネクスト・ドキュメント・フォーラム、2010年7月14日、東京ビックサイト
- ⑦ 加藤陽子「太平洋戦争を「かたち」から考える」、メトロポリタン史学会第六回大会、シンポジウム「二〇世紀の戦争——その世界史的位相」、2010年4月17日、首都大学東京
- ⑧ 川喜田敦子、「German Reparation and Wiedergutmachung after World War II? A Special Focus on the Issue of German External Assets?」、Asian Association of World Historians、2009年5月30日、大阪大学中之島センター
- ⑨ サーラ・スヴェン、「ドイツ人の日本観—明治・大正期、在日ドイツ人研究者の著書から—」、明治神宮国際神道文化研究所・第三回国際神道文化研究会招待講演、2009年4月18日、東京、明治神宮
- ⑩ サーラ・スヴェン、「OAGの歴史と在日ドイツ人の日本観」、2009年3月22日、奈良県立図書情報館、奈良県立図書情報館招待講演
- ⑪ 川喜田敦子、「Culture of Remembrance in Contemporary Japan - Interest in Historical Issues Abroad in Japanese Mass Media、History Education and Reconciliation - Comparative Perspectives on East Asia」、2008年10月14日、Georg-Eckert-Institut für internationale Schulbuchforschung（ゲオルク・エッカート国際教科書研究所）、ゲオルク・エッカート国際教科書研究所招待講演

〔図書〕（計17件）

- ① Sven Saaler、Christopher W.A.

- Szpilman(eds)、Rowman & Littlefield、*Pan-Asianism: A Documentary History, Volume 1:1850-1920*、2011年、357頁
- ② Sven Saaler、Christopher W.A. Szpilman(eds)、Rowman & Littlefield、*Pan-Asianism: A Documentary History, Volume 2:1920-Present*、2011年、422頁
- ③ Sven Saaler、Christopher W.A. Szpilman: “Introduction: The Emergence of Pan-Asianism as an Ideal of Asian Identity and Solidarity, 1850-2008,” in: *Pan-Asianism: A Documentary History, Volume 1:1850-1920 and Volume II: 1920-Present*, 1-41頁
- ④ Sven Saaler、 “The Kokuryukai, 1901-1920” , in *Pan-Asianism: A Documentary History, Volume 1: 1850-1920*, 121-132頁
- ⑤ Sven Saaler、 “Pan-Asianism, the ‘Yellow Peril’ , and Suematsu Kencho, 1905” , in *Pan-Asianism: A Documentary History, Volume 1: 1850-1920*, 141-148頁
- ⑥ Sven Saaler、 “Germany, Sun Yat-sen, and Pan-Asianism, 1917-1923” 、 in *Pan-Asianism: A Documentary History, Volume 1: 1850-1920*, 243-253頁
- ⑦ Sven Saaler、” Pan-Asianism during and after World war I : Kodera Kenkichi(1916), Sawayanagi Masataro(1919), and Sugita Teiichi(1920)” 、 in *Pan-Asianism: A Documentary History, Volume 1: 1850-1920*, 255-269頁
- ⑧ Sven Saaler, Christian Spang、「第一次世界大戦後の日独関係におけるドイツ東洋文化研究協会(OAG)の役割」、杉田米行編『1920年代の日本と国際関係』春風社、2011年、180-210頁
- ⑨ Sven Saaler、 “Das Deutschlandbild in Japans Politik und Gesellschaft, 1890-1914” , (1890年～1914年の日本の政界と社会におけるドイツ観)、in Bernd Heidenreich、Sönke Neitzel (eds), *Das Deutsche Kaiserreich 1890-1914* 、Schöningh, 2011年、285-302頁
- ⑩ 加藤陽子 「なぜ、日中戦争をとめられなかったのか」、NHK取材班編『日本人はなぜ戦争へと向かったのか』NHK出版、2011年、235-250頁
- ⑪ 加藤陽子、佐高信『戦争と日本人 テロリストの子どもたちへ』、角川書店、2011年、236頁
- ⑫ Akira Kudo、Nobuo Tajima、Erich Pauer(eds)、*Japan and Germany: Two Latecomers on the World Stage, 1890-1945, Vol. I: German Weltpolitik and the*

*Emergence of Japan as a Power: 1890-1931*, Global Oriental、2009年、193頁

- ⑬ Akira Kudo、Nobuo Tajima、Erich Pauer(eds)、*Japan and Germany: Two Latecomers on the World Stage, 1890-1945, Vol. II: Japanese-German Rapprochement Policy and its Reality: 1931-45*, Global Oriental、2009年、206頁
- ⑭ Akira Kudo、Nobuo Tajima、Erich Pauer(eds)、*Japan and Germany: Two Latecomers on the World Stage, 1890-1945, Vol. III: Technology, Thought and Culture - Individuals and Changing International Relations, 1890-1945*、Global Oriental、2009年、158頁
- ⑮ 田嶋信雄、「武器輸出解禁の政治過程—ナチス・ドイツと対中国武器輸出問題一九三三—一九三六」、成城大学法学会編『21世紀における法学と政治学の諸相』信山社、2009年、161-214頁
- ⑯ 田嶋信雄「ジェノサイドと科学」、現代企画室、『平和に向けて歩む人々 戦乱の記憶を乗り越えて』、2009年、141-158頁
- ⑰ サーラ・スヴェン「ドイツの新聞でみる『終戦』」、川島真、貴志俊彦編『資料で読む世界の8月15日』、山川出版社、2008年、119-130頁

[その他]  
ホームページ等  
プロジェクトのホームページ  
[www.nichidoku.japanesehistory.de](http://www.nichidoku.japanesehistory.de)

ドイツ東洋文化研究協会と開設したデジタルライブラリー  
<http://www.oag.jp/digitale-bibliothek/sonstige-buecher>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

サーラ スヴェン (SAALER SVEN)  
上智大学・国際教養学部・准教授  
研究者番号：70401205

### (2) 研究分担者

川喜田 敦子 (KAWAKITA ATSUKO)  
大阪大学大学院・言語文化研究科・准教授  
研究者番号：80396837

工藤 章 (KUDO AKIRA)  
東京大学・社会科学研究所・教授  
研究者番号：90092197  
(H20-21:研究分担者 H22:連携研究者)

田嶋 信雄 (TAJIMA NOBUO)  
成城大学・法学部・教授  
研究者番号：80179697

ヴィッピヒ ロルフ ハラルド (WIPPICH  
ROLF-HARALD)  
上智大学・国際教養学部・教授  
研究者番号：30240617

加藤 陽子 (KATO YOKO)  
東京大学・人文社会系研究科・教授  
研究者番号：90218321

石田 勇治 (ISHIDA YUJI)  
東京大学・総合文化研究科・教授  
研究者番号：30212898

萩谷 順 (HAGITANI JUN)  
法政大学・法学部・教授  
研究者番号：50409348  
(H20-21: 研究分担者 H22: 連携研究者)